文化

引退へ 音づくりに磨き

2024年末の引退を表明している指揮者の井上道義がラストスパートに入った。体調を理由にした決断だが、協演するオーケストラとの音づくりには一段と磨きがかかる。18日にはマーラーの壮大な交響曲を指揮し、濃密な音を響かせた。

井上道義指揮 マーラー「復活」

18日、マーラーの「復活」を指揮した©K.Miura

東京芸術劇場（東京・豊島）で開かれた読売日本交響楽団との演奏会で、マーラーの交響曲第2番「復活」を披露した。演奏時間80分の超大作だ。最後の花道を駆け抜ける76歳の勇姿を目撃しようと2000席が埋まり、熱気に包まれた。

荘厳な低音が地をはうように演奏が始まる。弦のトレモロはたっぷりと鳴らされ、ハープや木管に対しては手を優雅にひらひらさせて艶のある音を引き出す。バイオリンの弱音はさえ渡り、それが曲の主題をより際立たせた。

◆

第2、第3楽章に進むと、明るくも不穏さを醸す複雑な響きに。第4楽章はメゾソプラノの林真眸が芯のある歌声を聞かせる。次第に井上のタクトは緊張感と疾走感を増す。最後の第5楽章では合唱（新国立劇場合唱団）のアンサンブルが繊細で緻密な仕上がり。ホルン、トランペット、打楽器が舞台の外から響くのと相まって、神聖な音色が降り注いだ。

「復活」の終楽章ではバルコニーにトランペット隊を立たせるなどの仕掛けもちりばめた©K.Miura

今回、井上の意図がよく表れていたのが、最初は座って歌い出した合唱団が途中から立ち上がったシーンだろう。井上によると「楽譜を読めば、前半はどこか遠くから聞こえてくる音楽で、後半は人間の声」として表現すべきだと判断したそうだ。最後はソプラノの高橋絵理の慈悲深く伸びやかな声、そしてオーケストラのうねるような音流が復活劇を彩った。

演奏後のカーテンコールではバレエのようにくるっと一回転するなど、ちゃめっ気あふれる姿をみせた。演奏者がはけた後も拍手が鳴りやまず、改めて舞台上に登場すると、観客から「ブラボー」の大歓声が飛び交った。

井上はこれまで、新日本フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢などで主要ポストを歴任。14年には咽頭がんを患ったが、復帰後も各地のオーケストラと協演を重ね、17年のバーンスタインのシアターピース「ミサ」や、今年1月には自身の出自や苦悩を描いたオペラなど、こだわりの舞台で話題を集めてきた。

正攻法で持ち味生かす

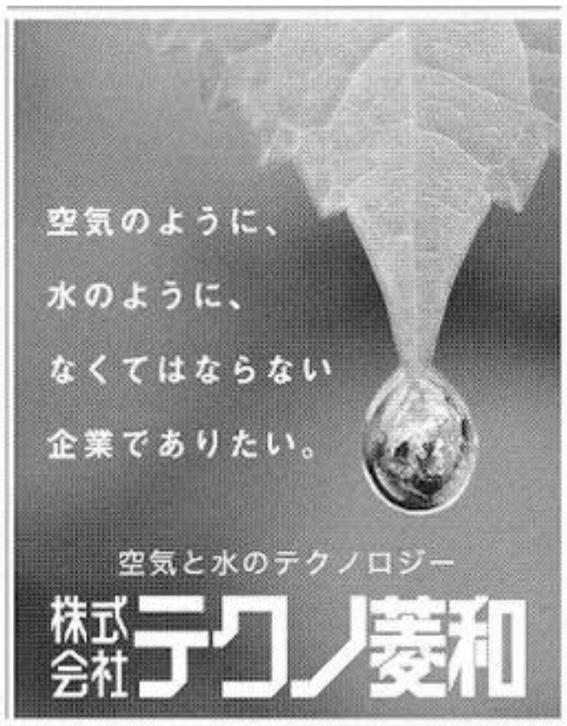
◆

最も思い入れがあるのが、旧ソ連の作曲家ショスタコーヴィチだ。07年に日ロ5楽団と交響曲全15曲を演奏するなど、生涯をかけて取り組んできた。社会主義体制下で二枚舌ともいえる皮肉が込められた作風が特徴だが「一人の人間が持つ二面性が、ショスタコーヴィチの作品にはある。井上道義という人間の根底にも、そういう性質があったから取り組んできた。世の中いい指揮者はいっぱいいるが、俺みたいな変なやつがやるから面白いと思う」。

ショスタコーヴィチの交響曲第4番を演奏後、ユニークなしぐさを見せる井上＝群馬交響楽団提供

10月29日にすみだトリフォニーホール（東京・墨田）で群馬交響楽団と披露したショスタコーヴィチ交響曲第4番は、まさに真骨頂を見せつけた。指揮台の上で軽快にステップを踏み、奏者を挑発するようにあおり立て、おどけるように横揺れしてみせては、もだえるようなしぐさで音を要求する。最後は残響が消えたところでくるりと客席を振り向いて、会場と一体になって楽しんでいた。群響とは最後の協演になるだけあって、多くのファンが惜しみない喝采を送った。

井上が引退を明かしたのは今から2年前。咽頭がんの影響によるノドの痛みに加え、体力的な衰えや低音が聞きづらいといった不安も感じ始めていた。今年1月に尿路結石で緊急入院し、復帰するも6月に結石性腎盂腎炎を発症した。2カ月近く闘病し、再復帰したのは9月のこと。「指揮棒にカビが生えたような感覚だったね」。再復帰した直後の練習でしみじみと語った。

高齢でも生涯現役を続ける指揮者は多いが「俺はみっともなく生きたくない。嘘の拍手は欲しくないからね」と、引退への思いはゆるがない。奇抜な振る舞いや歯にきぬ着せぬ物言いで親しまれてきたが、音楽への取り組みは正攻法そのもの。今後協演するオーケストラも井上の持ち味を生かすプログラムで応える。残された1年、掉尾のタクトを振り尽くす。

（安芸悟）